

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：12604

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12420

研究課題名（和文）テキストの特徴からみた日本語教育のための類義表現研究

研究課題名（英文）Synonymous expressions research for Japanese language education from the viewpoint of text characteristics

研究代表者

小西 円（KONISHI, Madoka）

東京学芸大学・大学教育研究基盤センター機構・准教授

研究者番号：60460052

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は類義表現の使い分けを、文章や談話といったテキストのスタイルの観点から記述することである。特に、日本語教育のために役立つ記述を目指す。そのためには、テキストのスタイルから類義表現を分析するとどのような記述が可能か、日本語学習者にとってどのような記述が有効であるかを把握する必要がある。として、『BCCWJ図書館サブコーパスの文体情報』に示されている5つの指標を利用して分析を行い、記述が可能な部分と難しい部分とを明らかにした。また、として、日本語学習者に対して調査を行い、学習者にとっては「テキストがくだけているかどうか」の把握が難しいことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語教育は、留学生のみならず、生活者・就労者・幼少中等高等学校に通う子どもたちなど、さまざまな対象者・分野でますます必要とされている。日本語教育におけるさまざまな課題の中でも、類義表現をどのように使い分けるかという点は、古くから課題であり続けている。近年はコーパスなどの言語資源を用いた分析が増えてきているが、多様なスタイルのテキストが分析対象になると、それらをどのように記述し分けるかが新たな課題となった。本研究では、スタイルを5つの指標から規定する際に学習者にとって把握が難しい点を明らかにした。これは、今後の類義表現記述の向上に寄与すると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to describe differences in synonymous expressions from the perspective of text style, such as sentences and discourse. The aim was to create useful descriptions for Japanese language education. To do so, there was a need to grasp (1) what kind of descriptions are possible for analyzing synonymous expressions from text style and (2) what descriptions are efficacious for Japanese language learners. Regarding (1), an analysis was performed using the five indexes shown in the "Writing style annotation for the library subcorpus of the BCCWJ." This clarified possible portions as well as difficult portions for descriptions. As for (2), a survey was performed of Japanese language learners. This clarified that it is difficult for learners to grasp "whether or not a text is informal."

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語教育 類義表現 日本語学習者 文体

1. 研究開始当初の背景

類義表現の習得は日本語教育において重要な課題であり、多くの研究が行われてきたが、意味の違いの記述には主観的な判断が用いられることが多く、再現性に乏しいという問題点があった。また、違いの記述に頻繁に用いられる「話し言葉」「書き言葉」という用語は、音声・文字といった媒体の違いや、くだけている・くだけていないといった改まり性の違いなど、多様な要素を内包しており、「話し言葉」「書き言葉」が指し示すものがあいまいであるという問題点もある。

このような問題を抱えた類義表現研究は、日本語学習者にとっても適切とは言い難く、異なる手法を用いた研究を進める必要があると考えられる。その際、近年大きな飛躍を見せるコーパスを用いた計量的な手法や、計量的な手法で明らかになった情報を用いてテキストのスタイルを把握し、それらを類義表現研究に応用する手法に可能性があると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語の多様なテキストの計量的な分析により明らかになった結果を用いて、テキストのスタイルの違いと、そこで使用される類義表現に関連があるかどうかを明らかにすることである。また、テキストのスタイルのうち、どのような指標が使い分けの記述に有用かを明らかにすることである。また、使い分けの記述が、日本語学習者の視点から見て役立つものとなるように、学習者に対する調査を実施して、その結果を活用することとする。

3. 研究の方法

(1) 指標を用いた類義表現研究

最初の課題として、多様なテキストのスタイルを分析する際の指標の選定が必要となる。検討の結果、類義表現としては逆接の類義表現を、指標としては『BCCWJ 図書館サブコーパスの文体情報』(柏野 2015)にて使用された文体情報(専門度、客観度、硬度、くだけ度、語りかけ性度)を用いることとした。これらの文体情報の有用性は、馬場(2018)が語の文体差の記述が可能であることを通して明らかにしている。また、調査対象とする類義表現を検討した結果、逆接の類義表現を対象とすることとした。これらを用いて、どのように類義表現を記述し分けることができるかを明らかにする。また、どのような指標が記述に有用かなどについても検討する。

(2) 日本語学習者を対象にした調査

日本語学習者を対象とした調査としては、日本語学習者が話す場合と書く場合とで、使用語彙にどのような異なりがあるかを明らかにする調査と、日本語学習者が読解の際にどのような文体把握を行うかの調査である。

前者の調査では、I-JAS(多言語母語の日本語学習者横断コーパス)を用いて、同一学習者の話すタスクと書くタスクを対象に分析を行い、媒体による違いや習熟度による違いを把握した。それにより、媒体によって学習者が類義語をどのように使い分けるかを知ることができると考えられる。

後者の調査では、上級の日本語学習者に多様なテキストを読んでもらい、『BCCWJ 図書館サブコーパスの文体情報』で使用されている専門度、客観度、硬度、くだけ度、語りかけ性度をどの程度読みとることができるか、調査する。日本語学習者の読みとりと、『BCCWJ 図書館サブコーパスの文体情報』で提供されている結果とを比較し、日本語学習者にとって把握が難しい指標を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 指標を用いた類義表現研究

研究成果の詳細は小西(2020)に収められているが、ここでは概要を述べる。

調査の手順は以下のとおりである。まず、逆接の接続助詞のクセニ、ケレドモ、トシテモ、ニシテモなど 15 形式を調査対象とした。類義表現の分類としては、たとえば、クセニ類などの見出し語をたて、そこに「くせに」「わりに」「にしては」の 3 種を意味的な類義表現として見出し語の下位類に割り当てた。それらを BCCWJ(現代日本語書き言葉均衡コーパス)で検索し、用例を目視で確認して、当該の接続助詞ではない用例を除外した。そして、検索された用例が使用されているサンプルの ID と、『BCCWJ 図書館サブコーパスの文体情報』に収録されている ID を照合し、各サンプルの文体情報(専門度、客観度、硬度、くだけ度、語りかけ性度の 5 指標)を抽出し、接続助詞の形式ごとに、5 指標の平均値を算出し、それらを比較することとした。

その結果、クセニ類、ケレドモ類などの見出し語単位では、専門度・客観度・硬度・くだけ度の 4 指標で何らかの順序が見られ、各見出し語に含まれる下位類の分類に役立つことがわかった。しかし、下位類として調査対象とした 15 形式全体を見ると、各指標の平均値は 2 ~ 3 の中央の値にあり、類義語を対象に調査を行った馬場(2018)とは異なる結果となった。また、これまで「話し言葉的」とされてきた形式と、「書き言葉的」とされてきた形式とが近い値を示す場

合もあり、「話し言葉」「書き言葉」という用語がどの指標と強く関連するのかを明らかにすることができなかった。これは、「話し言葉」「書き言葉」という用語が、複数の文体的な要素を含む複合的なものであることを示していると考えられ、「話し言葉」「書き言葉」に代わる指標を用いることの必要性が示唆された。

(2) 日本語学習者を対象にした調査

調査の研究成果の詳細は、小西(2021)に収められているが、ここでは概要を述べる。

調査は、I-JASに収録されている話すタスクと書くタスクを対象に、同一の学習者がどのような語彙を使用するかを比較分析した。学習者は中級前半群と上級群にわけ、習熟度別に比較した。書くタスクは、辞書を使用してもよいタスクであるため、より実際の第二言語使用の状況に近いと思われる。

調査の結果、書くタスクでは話すタスクより中級前半語以上の語で使用が増え、その増え方は中級前半群のほうが多かった。学習者による第二言語としての日本語の産出においては媒体の差や辞書使用の有無が大きく影響することが分かった。この調査では類義表現に焦点を絞ってはいないが、この結果からも、学習者が文体を把握して類義表現を使い分けることは、中級前半の学習者の話すタスクでは難しいことが分かる。そのため、学習者の文体把握は、まずは受容(聞く・読む)において調査する必要性があることが確認された。

調査の研究成果の詳細は小西(2024 印刷中)に収められているが、ここでは概要を述べる。

調査の手順は以下のとおりである。まず、『BCCWJ 図書館サブコーパスの文体情報』を参考に、異なる特徴を持つテキストを5つ選出し、読解調査のデータとして準備した。日本語学習者には、それらのテキストを読んで、専門度、客観度、硬度、くだけ度、語りかけ性度の度合いを回答してもらった。また事後インタビューで、どうしてその度合いだと思ったかなどを聞き取った。

調査に参加したのは、中級上から上級の12名の日本語学習者である。

調査の結果、日本語学習者は、論文やレポートと似たテキストの文体把握はより容易だが、エッセイのようなジャンルや、スピーチを文字化したようなジャンルの文体把握がより難しいことがわかった。また5つの指標の中では特にくだけ度の把握が難しく、くだけ度が持つ様々な待遇的な側面を部分的にしか把握できない様子が観察された。適切な文体把握のために、くだけ度を細分化することと、音声言語と文字言語における丁寧体の使用・不使用がもたらす効果を整理して提示する必要性が示唆された。

(3) 総合的な考察

調査分析の結果、文体情報を記述する5つの指標は有用ではあるものの、特にくだけ度において、くだけ度が包摂する待遇的側面が多岐にわたるため、それらを日本語学習者が適切に読みとれていないことが明らかになった。そのためには、「くだけている」ということの詳細な事例を、複数の要素に分けて、日本語学習者に用例とともに示す必要があると考えられる。

また、日本語学習者が、音声言語と文字言語それぞれにおける丁寧体の使用が意味するものを、十分に把握できていない可能性も明らかになった。これは、日本語教育において対応が必要であると考えられる。

これらによって、「話し言葉」「書き言葉」という用語を越えた文体記述の可能性が開かれると考えられる。

引用文献・資料

小西円(2020)「日本語教育のための文体情報を用いた類義表現の分析 逆接の類義表現を例として」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』第71集: 567-579

小西円(2021)「話す」タスクと「書く」タスクにおける産出語彙のレベルの比較分析 習熟度の差を中心に」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』第72集: 481-492

小西円(2024 印刷中)「上級日本語学習者は文章の文体をどのように把握するか」『国立国語研究所論集』第27号

柏野和佳子(2015)『BCCWJ 図書館サブコーパスの文体情報』(2015年公開第1版) <http://doi.org/10.15084/00003109>

馬場俊臣(2018)「『BCCWJ 図書館サブコーパスの文体情報』を利用した語の文体差研究の可能性」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』3: 241-256

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 小西円	4. 巻 72
2. 論文標題 「話す」タスクと「書く」タスクにおける産出語彙のレベルの比較分析：習熟度の差を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 総合教育科学系	6. 最初と最後の頁 481-492
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小西円	4. 巻 第71集
2. 論文標題 「日本語教育のための文体情報を用いた類義表現の分析 逆接の類義表現を例として」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』	6. 最初と最後の頁 567-579
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小西円	4. 巻 第27号
2. 論文標題 上級日本語学習者は文章の文体をどのように把握するか	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『国立国語研究所論集』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小西円
2. 発表標題 上級日本語学習者の文体把握に関するケーススタディ 「BCCWJ図書館サブコーパス文体情報」を用いた読解調査
3. 学会等名 言語資源ワークショップ2022
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小西円
2. 発表標題 コーパスを用いた類義表現研究
3. 学会等名 公開シンポジウム「コーパスを使った類義語・多義語研究」(招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 金澤裕之・山内博之(編)、小西円(分担執筆)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 『一語から始める小さな日本語学』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------